

## 山武郡横芝町・芝町 高谷川泥炭層遺跡の覚え書き

戸村正己

### はじめに

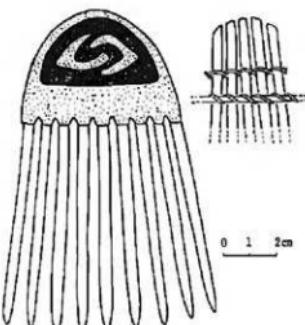
近年の発掘調査の対象範囲は、台地上のみならず低湿地に対しても拡大し、その調査件数が増加している。これは低湿地にある遺跡の特色として、独木舟や弓、櫓、杓子などの木製品のほか、籠、漆製品、繩、布などの有機質の遺物や、環境を復元するのに有効な情報が良好な状態で埋蔵されていることが知られてきたためである。この成果は、これまでの歴史観を少なからず塗り替えるものとして、資料を提供、蓄積させている。

さて、標題に掲げた高谷川泥炭層遺跡は、全国的にも稀な“漆塗り櫓”（縄文後期～晩期）がほぼ完全品で出土したことで知られている。昭和28年の慶應義塾大学考古学研究室によって発掘調査が実施されたものの、内容は概要報告に止まり、本報告書は未刊行である。そのため一般には遺跡の内容は勿論のこと、その存在すら忘れ去られている状況にある。

各地で低湿地遺跡の調査が行われ、特殊な遺物が次々と出土することが報道されて関心が高まっている点に加え、本遺跡が少年時代の筆者に考古学と親しむステップとなった様もあり、改めて重要な遺跡であるとの認識を強くしている。

そのため、これまで筆者が採集した遺物を含め、長年にわたるフィールドワークの成果を紹介することで、本遺跡の重要度が見直されることを目的に、拙稿を起こすこととした次第である。

また、周辺の類似する遺跡の調査結果を踏まえて、敢えて本遺跡についての考察も試みたいと思う。



第1図 高谷川泥炭層遺跡出土の漆塗り櫓  
(考古学雑誌第48巻第3号 1963年より)

### 遺跡の立地と地理的環境

高谷川泥炭層遺跡は、大きくは千葉県の北東部、九十九里浜に平行して張り出した下総台地の波食崖線から7.5kmほど奥まった位置にある。香取郡山田町・栗原町に源を発し、北から南々東方向に流路をとり、やがて太平洋に注ぐ九十九里平野最大の栗山川の一派である高谷川低地に所在する。高谷川は、成田空港が立地する成田市三里塚辺りに源を持ち、台地を複雑な樹枝状に開析する侵食谷の巾を北西から南東方向に流れ、光町新井地先で木流の栗山川に合流する全長9,594m余りの河川である。

遺跡は、同河川に沿った低湿地帯の水田および河川堤防、川底に広がり、標高約5~7mを測る。厚い泥炭層中に土器や石器、木器などの有機質遺物を多量に包含している。一帯の低地は現在水田として利用されている。低地を見下ろす両岸の台地は、標高約35~40mを測り、低地面との比高差が大きく台地の端部は急峻な斜面となって低地に面している。

一方、本流の栗山川の谷底低地は、太平洋に面した九十九里平野の中でも特に開析面積が広く、借当川、多古橋川などが合流する地域で最大幅約5kmを測る。この地域は、九十九里平野の成因と相まって、砂州や砂堤、低湿地や潟湖などからなる広大な湿地帯が広がる泥炭層形成地域であったと考えられ、地理的に見て、最も視野が開けた言わばメインゾーンに位置すると思われる。

これに対して、高谷川の場合は、支流中最も南寄りを流れ、低地幅は約500m程度であり、しかも、下総台地が合流地点近くまで接近し、周囲を丘陵が取り囲む狭まった立地環境である。このことから、栗山川流域の眺望のきく低湿地帯に立地した同時期の借当川遺跡や矢擣泥炭遺跡とは、交流の有無は別にしても、趣を異にした地域であるように思われる。(第3図参照)

### 遺跡の発見と研究歴史

高谷川泥炭層遺跡の発見は、昭和28年に行われた河川改修工事に伴って、漆塗りの櫛(第1図)が偶然に発見されたことが契機となり、清水潤三氏を代表とする慶應義塾大学考古学研究室によって発掘調査が、昭和28年12月(第一次)、昭和29年11月(第二次)に実施された。その調査結果は概要報告(清水 1958a, 1963a)として発表された。

報告の一部を紹介すると、「水田面から測って、1.7~1.8mに厚さ60~70cmの泥炭層がある。この泥炭層はアシとヒシの実からなり——中略——流木や多量の遺物を多く含んでいる。遺物は豊富な加曾利B式土器片のほかに弓断片、櫛断片、その他木器破片と覺しきものがある。特記すべきは巾1m、長さ3.5mにわたって11本の杭が発見され——中略——さらに発掘地点の西北方、谷の中央に向かって約10m離れた排水溝の断面に、独木舟の一部を発見し、——中略——周囲から同じく加曾利B式の土器片を少なからず出土しているから、その年代は明らかである。——中略——また、舟底直下に接して簡単な彫刻を施した櫛の柄端が発見され、從来、畠町、

八日市場などで出土した同種遺物の年代決定に、有力な手掛かりを得た。この舟の数m西方で、——中略——漆塗櫛を発見しているが、——中略——本遺跡は出土品に注目すべきものが多いうえにはなはだ低い渓谷内に位置し、遺跡の性質に興味がひかれる」と記録されている。この第一次、第二次の発掘を通じ「過去における漆塗り櫛の発見といい、この完形土器の出土といい、この遺跡が貝塚のようなゴミ捨て場ではなく、水上住居の跡をとどめるものとする可能性が大であるが、なお確証はつかみがたい」として、本遺跡の性格について問題が提起されたが、それ以上の踏み込んだ論究はなされなかった。

それ以後は殆ど封印された形で推移し、筆者の拙稿（戸村 1982, 1983, 1991, 1995）が出るまでは本遺跡に関しての記述は全く途絶えていた。

とはいっても、昭和30年前後において他方で清水氏の低地遺跡の研究は継続され、低地遺跡の性格を解明するため、その対比として総合的な九十九里地城の台地の遺跡、特に貝塚についての精力的な研究が進められた。その研究の一端が『千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）』（清水 1958b）としてまとめられている<sup>(4)</sup>。

今日、この研究成果を引く懸念のような形で、西山太郎氏等により当地域の低地遺跡の研究が進められている。

### 河川工事秘話

河川改修工事が行われる以前の高谷川は、蛇行した流れを持ち、沿岸は湿地帯が広がり、耕地は常に水が満ちて、降雨の度毎に冠水の被害が出るという状態であった。しかし、昭和28年に実施された上地改良事業の河川改修工事によって大規模に改修され、今日見るコンクリートブロックの護岸堤防の高谷川の姿になった。（第2図参照）

遺跡の確認は、前述のように工事による偶然の発見が契機となり、このことが発掘調査の実施に結びついた。しかし、工事に直接携わった方から当時の生々しい状況を聞き及ぶと、皮肉にも失われた遺跡の規模は計りしえない。

その内容は、①工事の最中に形のわかる土器や独木舟がかなりの点数出土したこと

②しかしながら、当時は工事を進めることが最優先され、時代的背景もあり遺跡

・遺物の存在は重視されなかった

③原形を止めていた土器類はスコップの先端で割られ、独木舟なども取り上げられることなく壊され、埋め戻された

などで、本遺跡がそれまで如何に良好な状態で包蔵されていたかを、如実に物語っている。

### 遺物の採集と遺跡の範囲確認

筆者が調査を始めた昭和40年代頃の遺跡の状況は、既に工事は終了段階にあり、今日見る流路となっていたが、辛うじて堤防はコンクリートブロックで覆われてはいなかった。そのために、表面的な遺物の確認が可能であった。

水位が30~50cm程になる澁水期には、川底や堤防中に夥しい量の土器の破片が露出し、時に完形の土器が川底にその姿を現しており、比較的容易に採集できる状況下にあった。遺物を採集した結果、以下に示す地点が確認されるに至った。

本遺跡の所在については、当初の発掘調査では横芝町谷台（やつだい）地籍として記録されている。しかしながら、調査地点に隣接する芝山町殿部田（とのべた）地先の水田から、後年に土器や独木舟が発見されていることや、筆者自身の踏査においても、上流域の芝山町山田地先（本流合流地点より約5km上流）の川底で土器片（繩文後期 加曾利B式比定）を採集している。現時点ではこの地点を最上流部として、下流域においても遺物出土地点数ヶ所を確認している。更に同町大台、同宮崎地先から独木舟が出土しており、昭和54年には横芝町木戸台地先の低地遺跡が確認・報告されている（西山 1980）。以上のことから、遺跡は、今日の行政区分の枠を超えて、芝山町、横芝町に跨った広範囲な低湿地遺跡群として把握される必要がある。

筆者がこれまでに確認した箇所を便宜上 A・A'・B・C・D に分け、遺跡の広がりを把握する目安とした。各地点の概要は以下のとおりである。（第2図参照）

A 地点 慶応義塾大学による調査地点を含む地域で、本流の合流地点より約1.7km上流の芝山町殿部田字三種田105番地付近の水田及び左・右岸堤防、川底。

遺物は、土器を主体に、磨石および石鐵2点、他に木の実（クルミ）が採集されている。遺物の包蔵状態は、左岸堤防に比して右岸堤防に遺物の集中箇所が見られ、堤防の中間の砂礫と泥炭を含む層中に大型破片が重なりあった状態であり、川底には、5cm×10cm程の小破片が夥しい状態であった。（包蔵・散布面積は5地点中、一番大きい規模と見られる）

A' 地点 A 地点の230m 上流の南西方向より高谷川に流れ込む支流の開口付近堤防。

遺物は、土器片（小破片）のみで、堤防中に僅かに見られる程度。

B 地点 A 地点より約400m 上流の芝山町殿部田字三反町17番地付近の左岸堤防。

遺物は、約2ヶ所の地点で左岸堤防下層の泥炭層中に土器、及び磨石が採集されている。

C 地点 B 地点より約200m 上流の芝山町高谷字居下5-1番地及び同町山中字東風山下264番地付近の左・右岸堤防及び川底。

遺物は、土器が主体で他に凹石（多孔石）、骨角器（エイの尾棘製）が採集されている。



● 各地点 ◎ 魔古大突頭調査推測地点 □ 強木舟出土地点 ■ 台地上の道路 ----・堀河川道路

第2図 高谷川泥炭層遺跡のひろがり (国土地理院 2万5千分1地図より)

遺物の包蔵状態は、堤防下層の泥炭層中に大型破片やほぼ完形の土器が包含されており、ボーリング棒にて堤防を突き刺す方法により遺物を採取。包蔵面積は A 地点に次ぐ面積と目される。

D 地点 C 地点より約 500m 上流の同町山中字合ノ谷 831 番地付近の左・右岸堤防。

遺物は、土器および所属時代不明の骨角器<sup>(12)</sup>が採集されている。遺物の包蔵状態は、堤防下層の泥炭層中に大型破片の土器および完形土器が包含され、ボーリング棒による探査により採取。

以上の地点（第 2 図参照）を挙げることができるが、工事終了後の堤防面での観察という限定された条件の中での踏査であったため、遺跡は上記に示した範囲以上に広がっている可能性が十分に考えられる。しかしながら、護岸整備が進んだ現段階においては遺跡の範囲を把握することはまだ困難な状況である。

なお、本遺跡からは他に、弥生土器や土師器、須恵器、墨書き器等が出土している。

#### 採集遺物

遺物の採集は、各地点の概要を示した通りである。土器を中心であり、内容は從来認識されている縄文後期加曾利 B 式を主体に後期全般の土器型式が見られる。次いで晩期初頭～中葉のもの、僅かに中期の加曾利 E 式、後期初頭の掘之内式が見られる。遺物は、A 地点～D 地点および上流部の山田地先から採集されているが、とりわけ A、C、D の各地点採集の遺物について掲載する。

A 地点採集（第 4 図 1～21・第 5 図 22～32・第 6 図 33～48）（第 1 図 漆塗り櫛）

第 I 群（第 4 図 1～21・第 5 図 22～32・第 6 図 33～40）後期に属するものを一括

第 1 類（1・2）中期中葉の加曾利 E 式に比定されるもの。

第 2 類（3・4）後期前半の掘之内式に比定されるもの。

第 3 類（5～32）加曾利 B 式に比定されるもの。

第 4 類（33～35）曾谷式に比定されるもの。

第 5 類（36～40）安行式に比定されるもの。

第 II 群（第 6 図 41～48）晩期に属するものを一括

第 1 類（41～45）安行 III a 式に比定されるもの。

第 2 類（46）安行 III b 式に比定されるもの。

第 3 類（48）安行 III c 式に比定されるもの。

第 4 類（47）前浦式に比定されるもの。

C 地点採集（第 6 図 1～7・第 7 図 8～19・第 8 図 20～23・第 9 図 24～28・第 10 図 29～34・第 11 図 35～38）

第Ⅰ群（第6図下～第10図）後期に属するものを一括

第1類（1～33）加曾利B式に比定されるもの。

第2類（34）安行式に比定されるもの。

第Ⅱ群（第11図35～38）晚期に属するものを一括。

第1類（35～37）安行Ⅲb式に比定されるもの。

第2類（38）前浦式に比定されるもの。

D地点探集（第12図1～3）

第Ⅰ群（同上）後期に属するものを一括。

第1類（1、2）加曾利B式に比定されるもの。

（3）ソケット様骨角器（鹿角製）

以上、各地点より探集の土器を大まかに分類してみた。概観すると、各地点とも加曾利B式の範囲のものが共通して見られ、その中でも後期中葉のB2～B3式が目立っていることが観察される。

### 周辺の遺跡

本遺跡と同時期の主な周辺の遺跡について見てみると、高谷川流域の右岸地域では、牛熊貝塚①〔横芝町〕、山武純山貝塚②〔横芝町〕、小池台遺跡③〔芝山町〕、肩合台遺跡〈貝塚〉④〔芝山町〕、上宿遺跡⑤〔芝山町〕、木戸台低地遺跡⑥〔横芝町〕などがあり、左岸地域では、殿部田宮台遺跡⑦〔芝山町〕、境遺跡〈貝塚〉⑧〔芝山町〕、東台遺跡⑨〔芝山町〕などがある。

本流の栗山川周辺地域においては、島遺跡⑩〔多古町〕、桜宮遺跡〈貝塚〉⑪〔多古町〕、姥神台遺跡⑫〔山田町〕、六所遺跡⑬〔多古町〕、南僧當遺跡〈低地〉⑭〔多古町〕、宮田下泥炭遺跡⑮〔八日市場市〕、矢摺泥炭遺跡⑯〔八日市場市〕、久方貝塚⑰〔八日市場市〕、馬場貝塚⑱〔八日市場市〕、寺上貝塚⑲〔八日市場市〕、多古田泥炭層遺跡⑳〔八日市場市〕などがある。（第3図参考）

以上、時期を限定した場合でも、特に栗山川流域は九十九里沿岸地域の中でも特に遺跡の集中域であることがわかる。これは、本流域の特徴である広く複雑に開析された地形が、遺跡の立地条件に適っていた結果と受け止められる。

栗山川流域の低湿地からは、昭和30年代前半以降に実施された耕地整理及び治水事業に伴って約50隻以上の独木舟の出土が確認されており、当時、独木舟が生業活動はもとより、集落間の往来のための水上交通手段として有効的に利用されていたことが想像される。

## 類例遺跡の調査結果の概要

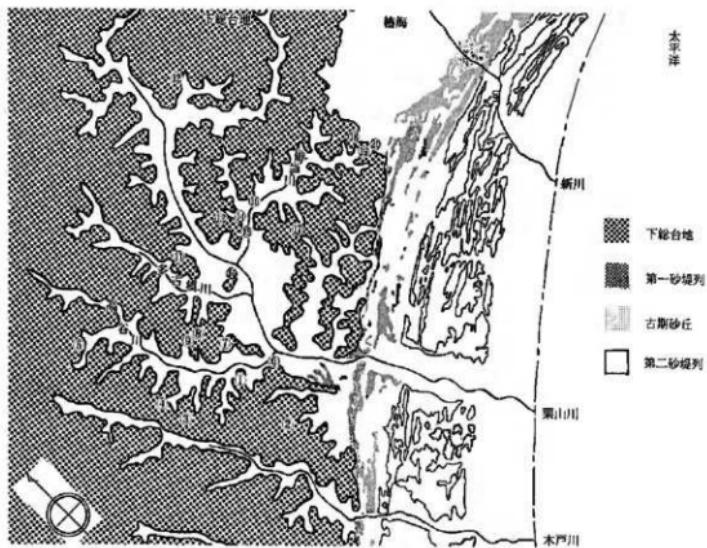
次に調査されている栗山川流域の類例遺跡数例を挙げてみたい。

### a) 多古町 南借当遺跡（第3図⑩）

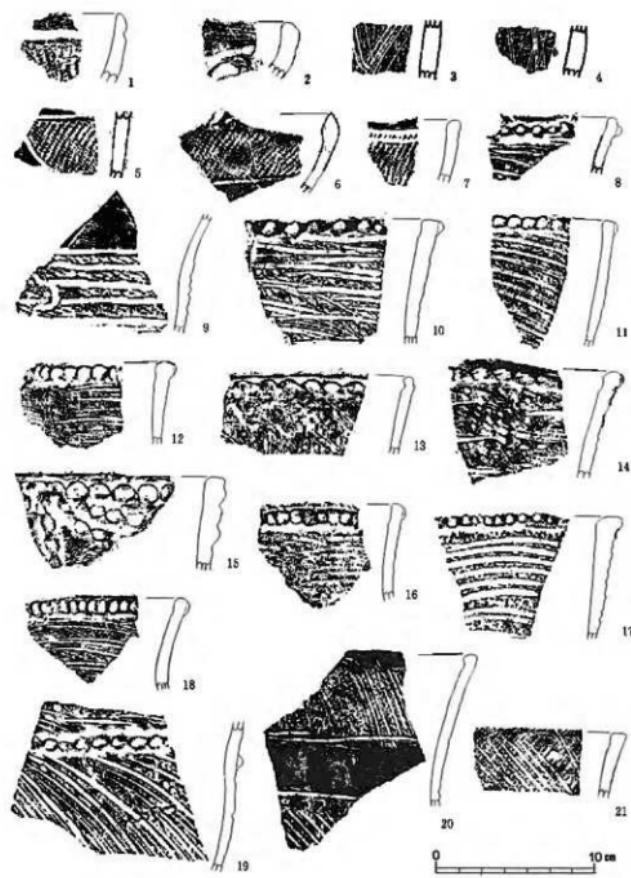
昭和60年～63年に県文化財センターにより調査された。遺跡は、栗山川の一支部南借当川の下流域標高約5m前後の谷地中央河岸地点に所在する。縄文時代の遺物は中期以降・後期・晩期中心の土器類（中でも主体は後期の加曾利B式）や木製品及び骨角器などが地下約2mの暗褐色土（9層～11層、約1mの厚さ）の泥炭層中に含まれておらず、多數の遺物が検出された。なお、遺構としては杭列が検出されたのみである。

考察では、遺物の在り方を、縄文時代後期・晩期の頃、海退に伴って形成された浜堤上に生活の一部が営まれ、遺物が泥炭層中に落ち込んだものであろうとしている。

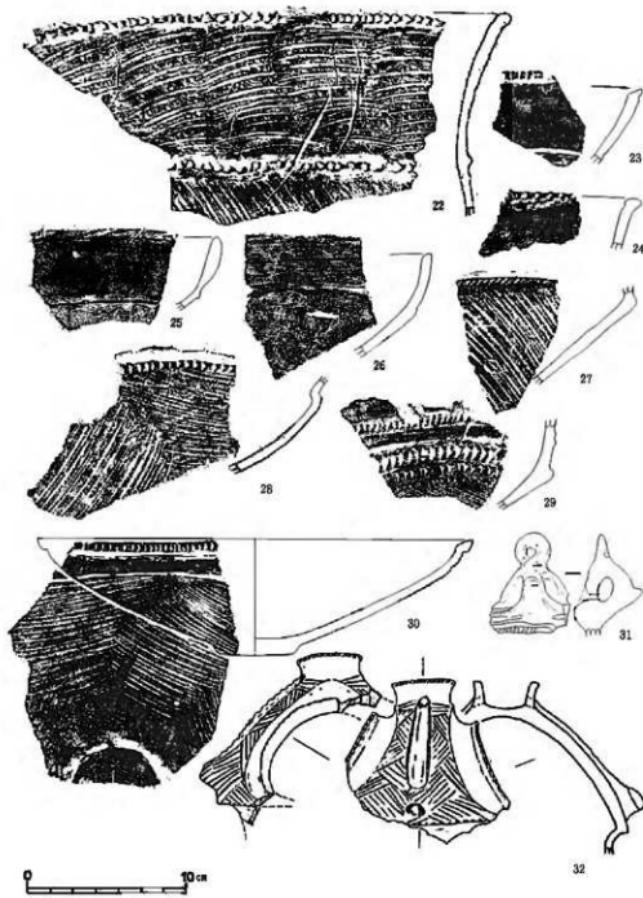
また、杭列については、矢摺泥炭遺跡例のような船着場的な機能を有していた可能性を挙げ、遺跡の性格を、「未だ調査された例はない台地帯から河川部にかけての範囲内にも、確実な遺構、それも集落的な遺跡の検出される可能性を示唆している。当遺跡で出土の土器も隣接する



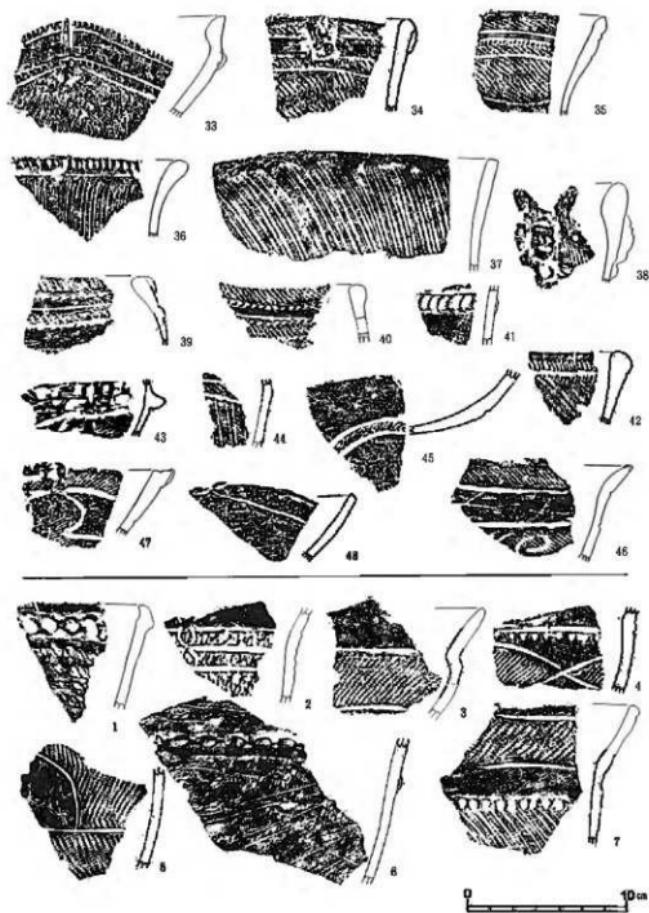
第3図 周辺の遺跡



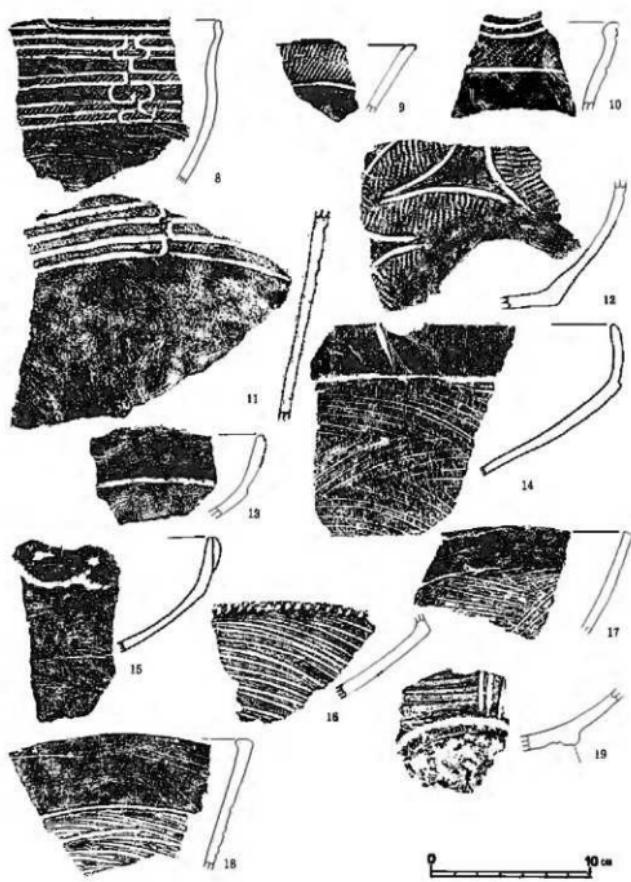
第4図 高谷川泥炭層遺跡A地点探集土器(1)



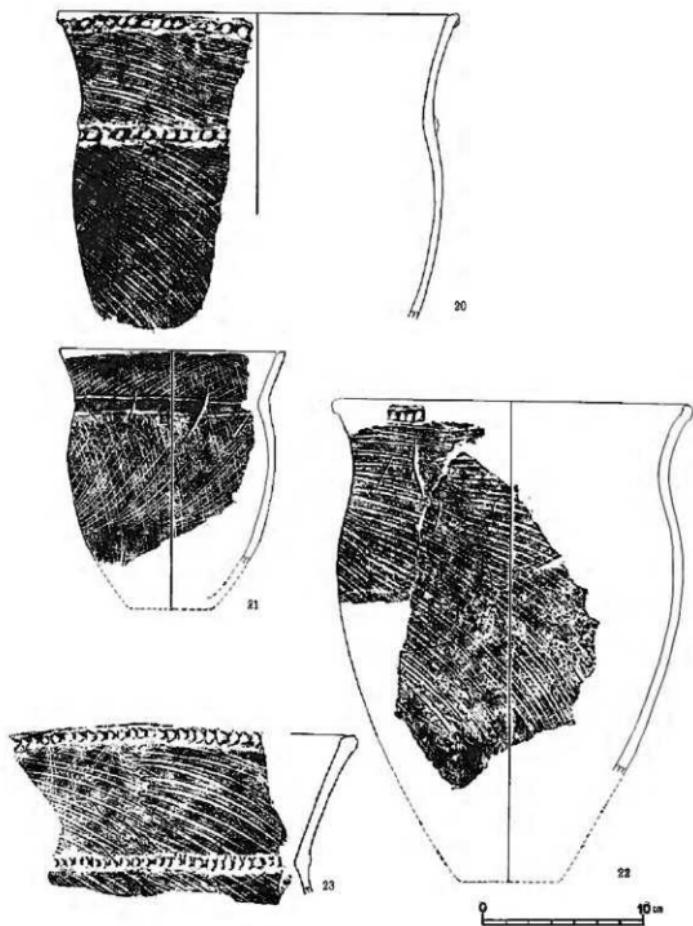
第5図 高谷川泥炭層遺跡A地点探集土器(2)



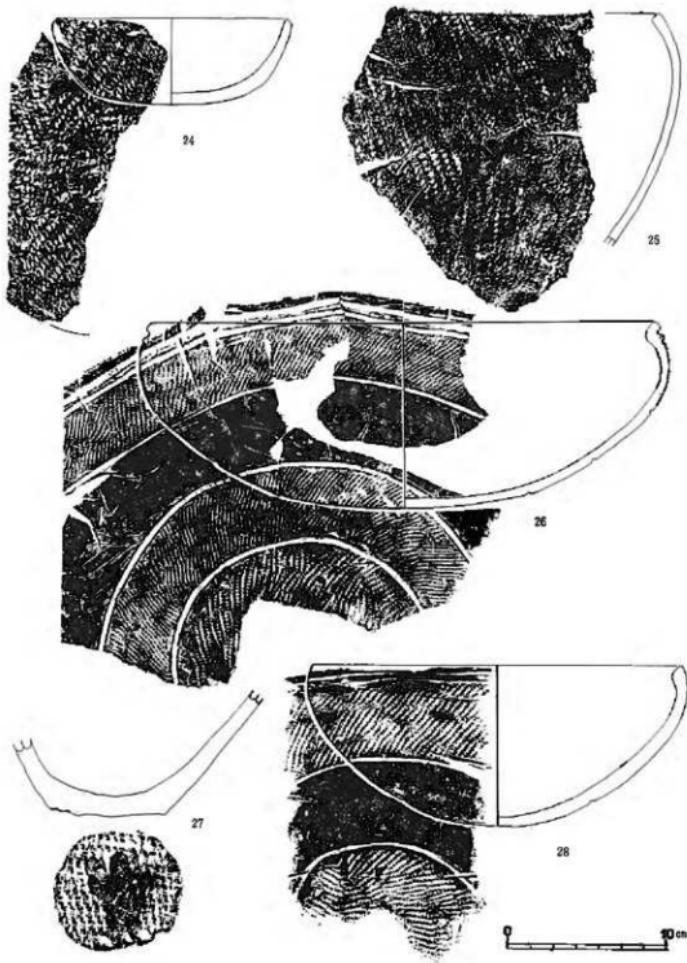
第6図 上：高谷川泥炭層遺跡A地点採集土器(3)・下：C地点採集土器(1)



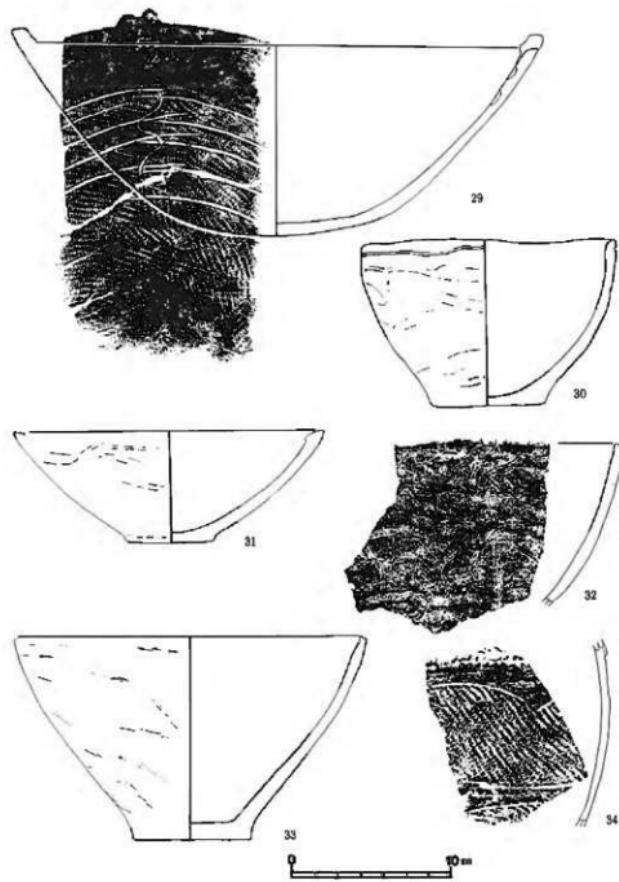
第7図 高谷川泥炭層遺跡C地点採集土器(2)



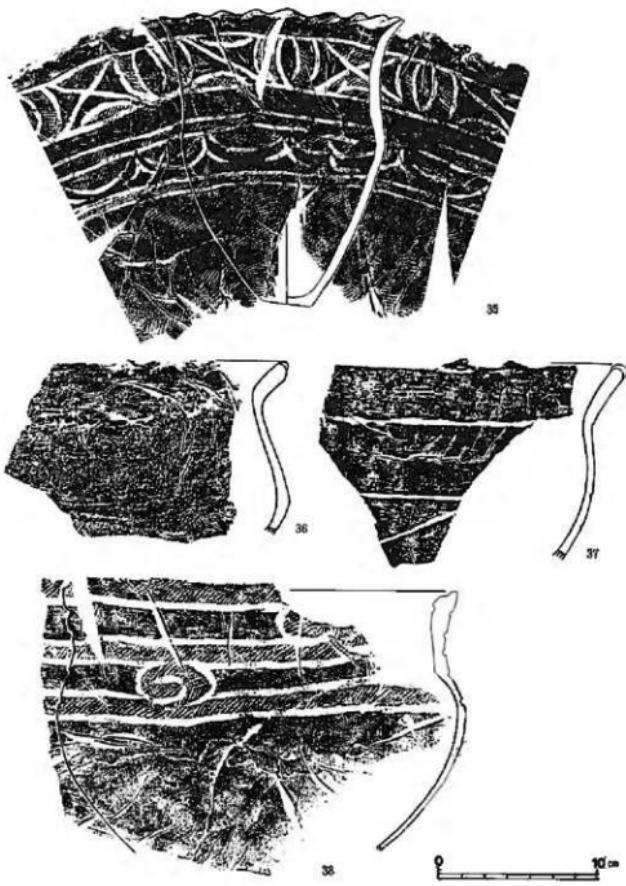
第8図 高谷川泥炭層遺跡C地点採集土器 (3)



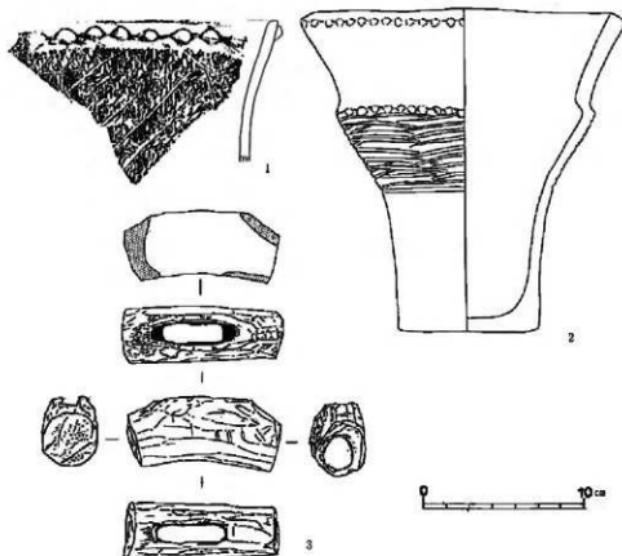
第9図 高谷川泥炭層遺跡C地点採集土器(4)



第10図 高谷川泥炭層遺跡C地点探集土器(5)



第11図 高谷川泥炭層遺跡C地点探査土器 (6)



第12図 高谷川泥炭層遺跡D地点採集土器・鹿角製品

そのような遺跡からの投棄・河川の氾濫による流入等によりもたらされたと推測される」と結んでいる。

#### b) 八日市場市 宮田下泥炭遺跡（第3図b）

昭和60年に借当川遺跡調査会により調査された。遺跡は、栗山川の一支部借当川の下流域、標高5mの谷地中央河岸地点に所在する。南借当川より約800m下流である。土層は大きく5層に分けられ、第Ⅰ層は地表面から約40~60cmの黒褐色の粘土（水田耕作土）、第Ⅱ層は約30~50cmの暗灰褐色泥炭層、第Ⅲ層は約1mの黒色泥炭層、第Ⅳ層は50cmの黒色泥炭層で種子、木の実、アシ等が多く含まれ、この層の下部より独木舟が出土した。第Ⅴ層は貝殻を若干含む砂層である。第Ⅲ層上面において土師器が出土していることから、この層を古墳時代以後の泥炭であろうとしている。

縄文時代の遺物及び遺構の検出は、第Ⅳ層からであり、15本の杭列が確認され、その内の数

木の杭が独木舟を挟む形で出土している。この独木舟の内部に完形の旋形土器（加曾利BⅡ式比定）が置かれたように正位の状態で検出されていることから、独木舟は縄文時代後期所蔵のものと考えられている。この他、カシ製の樅状木製品2例と丸木弓（全長152cm、完形品、イヌガヤ製）が出土し、鹿角、ヘアピン（鹿角製）、土器片鱗および縄文土器が検出されている。土器は量的には少ないが後期加曾利B式が主体で出土している。

遺跡の性格については、独木舟が杭に挟まれた形で存在し、しかも折れた状態で検出され、さらに完形の上器が船体内部で発見されていることから、独木舟の使用時期と窓棊に関する若干の問題が提起された。しかし、それ以上の論究はなく遺跡の性格については不明である。

#### c) 横芝町 木戸台低地遺跡（第3図⑥）

昭和54年に町教育委員会により確認調査が行われた。遺跡は、栗山川の一支流高谷川の下流域、標高5mの河川に沿った低地（水田）に位置している。土層は大きく3層に分けられ、第I層は表土層、第II層は黒色の粘性ケト土（泥炭層）、第III層は灰褐色の砂層で、遺物は縄文後期加曾利B式土器を主体に、第II層と第III層の接点から出土している。（量的には少なく、大部分が破片であるが、完形に近い土器が2点出土）独木舟は第II層中に確認されている。

調査の内容は、①縄文時代後期（加曾利B式）土器が集中して出土 ②破片が多いが、完形に近い土器も出土 ③土器にタール、煤状の付着物が観察される ④土器が発見される範囲が比較的限定されている ⑤独木舟が近接して発見されている ⑥他に遺物は発見されていない ⑦台地崩壊より約200m程離れていて、平坦な地形上有る、と要約され、遺跡の性格については一時的なキャンプ地として利用された可能性を挙げている。また、遺物の在り方については、上流から流れ込んで堆積した可能性もあることを指摘している。

#### d) 八日市場市 多古田泥炭層遺跡（第3図⑧）

昭和36年、土地改良工事により発見され、慶應義塾大学考古学研究室により調査された。正式な発掘調査報告書は刊行されていないが、他の論文等によれば、遺跡は、栗山川の東部、旧橋の海と呼ばれた現在水田になっている標高5mの低地西端に位置する。泥炭層中に多量の縄文時代後期～晩期に亘る土器の他、彫刻のある椎、漆塗りの杓子、独木舟断片など多岐にわたる遺物が発見されている。

土層の概略は、第I層が30~40cmの水田耕作土（表土）、第II層は30~60cmの泥炭層、第III層は砂層。遺物は第II層の泥炭層中から集中して出土し、土器は泥炭層下半部に、椎その他の木製品は上半部に出上の傾向がある。遺跡の性格については具体的には論じられていないが、鈴木公雄氏は当遺跡の在り方に関連して、泥炭層遺跡の出現と貝塚の消滅という現象を把え、「遺跡の周辺において貝類の採集が不可能になったことを示すものであり、食料獲得の一手段が失われたことを意味する」（鈴木 1968）として、低地遺跡の存在を台地上に存在する遺跡との関係から、「食料獲得手段の一側面の現れ」と位置づけている。

### 高谷川泥炭層遺跡の把え方（推察）

本地域の低地遺跡は、縄文時代以降の海退現象に連動した平野部形成過程における地形の変化に適応して、低地域に生活領域を拡大した人々の痕跡として把えられている。

低地遺跡は大きく2つに分けられている。①砂堤上や台地裾部の微高地、河川の縁辺に形成された河畔砂丘上などに遺物が存在する遺跡 ②背後の台地に挟まれた谷底低地に土砂が流入してできた湿地帯に泥炭層が形成され、その中に土器や独木舟などの遺物が存在する遺跡〔『低湿地遺跡』『泥炭層遺跡』〕である。

それでは、高谷川泥炭層遺跡の場合はいかなる性格の遺跡と見ることができるであろうか。これまでに得られている情報により推察してみたい。

先ず、慶應義塾大学調査の概要報告を要約すると、

- a) 標高5m程の低地に位置する。
- b) 土層は表土から剥って170~180cm下層に60~70cmの泥炭層がある。
- c) 泥炭層はアシとヒシの実によって構成され、縄文土器（加曾利B式）の他、弓断片、權断片、木器片が検出され、同時に独木舟と11本の木杭列が検出されている。
- d) 完形の浅鉢形土器（加曾利B式）が正位の状態で検出。また、夥しい土器片の出土がある。
- e) 漆塗り櫛の発見。
- f) 住居跡のような遺構は発見されてない。

などの状況が確認できる。これに、筆者確認の内容とを重ね合わせてみた場合、

① 慶應義塾大学発掘調査地点については、横芝町谷台地籍、調査年が昭和28年であることが判明している。さらに、文中の「新たに河川（左岸）に接して掘られた用水溝の断面より漆塗り櫛の発見」との記述により、「横芝町行政区域内であること」。“調査年と工事開始年とが同年であること”がわかる。そのことから推測すると、現河川はこの時点では未だ作られては無く、現河川A地点付近の北方約40m付近に旧河川の流路が在り、その左岸の現在水田として利用されている場所が発掘調査地点と考えられる。

つまり、筆者が確認しているA地点とは近距離にあるが、明らかに地点が異なるため、新たな地点としての追加が可能であると考える。（発掘調査地点の推測）（第2図参照）

- ② 上記同様、旧河川の流路に各地点を当てはめて見るならば、A地点およびB・C地点が旧河川の流路からはずれ、A'・D地点はほぼ一致する。この中で特に工事により新たに掘削された現流路地点（A・C地点）において、大型土器片や完形土器など良好な遺物が多く採集されている傾向が見られる。（各地点の再確認と遺跡の広がりの可能性）（第2図参照）
- ③ 遺跡の立地は、A地点のみ台地上の遺跡（牛熊遺跡〈貝塚〉縄文後期加曾利B式～晩期千綱式）に隣接。他の地点は谷部中央の低平坦地に存在する。（立地状況）（第2図参照）
- ④ 各地点採集の遺物は、所属時期が慶應義塾大学調査内容とほぼ一致する縄文後期加曾利B

式土器が主体である。(所属時期)

- ⑤ 大型破片ないし完形に近い土器が見られ、煤など炭化物の付着したものが多くあり、摩滅はほとんど見られない。(土器の観察)
- ⑥ 石鎚、磨石、凹石、骨角器、木の実(クルミ)が採集されている。(他遺物の内容)
- ⑦ 低地を望む周辺の台地上にも、同一時期の遺跡が存在している。(同一時期の台地上の遺跡の存在)(第2図参照)

以上の状況を基に、類例遺跡の内容を参考にして本遺跡の性格を推察したい。

◎標高約5mの低地に立地する。

◎土器の所属時期が縄文後期加曾利B式主体であり、炭化物の付着したものが見られる。

◎大型土器片(完形土器を含む)が出土している。

◎独木舟と杭列が検出されている。

◎住居跡のような遺構の検出はない。

栗山川流域の南僧当遺跡や宮田下泥炭遺跡、木戸台低地遺跡などにも共通する内容である。このことから、基本的に高谷川泥炭層遺跡も、上記遺跡と同様の性格を有する低地における生活領域の進出形態のひとつとして考えたい。それは、漁労や狩猟などの生産基地として、また、他の集落との交通手段として舟の保留などに使用されたものではないかと考えられる。

高谷川泥炭層遺跡を含めた前述の類似遺跡とは出土遺物から見てほぼ同時期(縄文後期加曾利B式期を中心として前後の時期に所属)であることから、この時期、栗山川流域には同様な遺跡がかなり存在していたのではないかと推察される。

本遺跡の性格について、遺跡の立地類型(寺門1972)を基とした低地遺跡パターン(西山1980)A類(台地裾部の微高地上低地遺跡)、B類(砂堤(砂丘)遺跡)、C類(低湿地遺跡)の分類に加え、出土遺物の内容からa(居住地)、b(キャンプ地)の類型分類方法に照らせば、現段階においてC類bとA類の複合型の遺跡と考えができる。

## まとめ

筆者が本遺跡の踏査を開始してから既に四半世紀が過ぎた。今回掲載させていただいた内容は、当時既に工事が完了していた状況下において行い得た可能な限りの活動の記録である。

それは、ボーリング棒を手に川底や堤防土中より遺物を採集し、遺跡の存在を確認する作業を積み重ねて得られたデータであり、言うならば表面的観察の延長に過ぎない内容のものである。とはいって、発掘調査報告書が未刊の今日、本遺跡の概略を知る上ではこのようなデータであれ、少なからず役立つものと考える。

本遺跡は前述したように、基本的に栗山川流域に存在する他の低湿地遺跡と同様の性格を有するものであろうと考えている。しかし、他に比して“多い量の土器片の存在や、煤や煮こ

ぼれ跡と見られる炭化物が厚く付着した土器が多く出土している”状況があり、その場所において活発な煮込み作業が行われた痕跡と考えられる面もあることから、押しなべて同列とは言い難いように思われる。

多古田泥炭層遺跡において同様な状況が観察され、成田市の取香川低地遺跡発掘調査例<sup>(註3)</sup>でも類似した内容が見られているが、それぞれ立地的な違いがあり、性格は若干異なるものと考えられる。低地遺跡と一口にいっても、地理的条件の違いや、台地上の遺跡との関係などにより、その内容も一律ではなく当然違いがあったものと思われる。

近年、低地遺跡の調査が増えたとは言ても、まだその件数は限られた範囲のものであり、データ不足の状況に大きな変化はないことから、多くを論ずること自体無理な状況と言わざるを得ない。本遺跡の在り方については、前述した問題点を含め、低地における居住の可能性も併せて考慮する必要がある。いずれにしても、同類遺跡の調査件数の増加と、今後に亘る研究の成果に期待しなければならないのが現状である。

このような状況の中でありながら、不安定なデータを基にして、無謀にも高谷川泥炭層遺跡の在り方及び性格までも推測し論じた。しかしながら、浅学ゆえに手探りの状態での展開であったことは否めなく、内容的には大方批判の対象となるものである。従って先学諸氏の御教示を切にお願いする次第である。本拙稿が、これまで封印された形で今日に至っている高谷川泥炭層遺跡について、多少なり認識していただく機会になれば幸いと考える。

微力ではあるが、今後も栗山川流域の低湿地遺跡の研究に寄与してゆきたいと考えている。

最後に、この度の執筆の機会を与えて下さった加曾利貝塚博物館の村田六郎太氏、佐藤順一氏に記して感謝する次第である。

（フィールド考古足あと同人）

## 註

（註1）上貝塚・上谷の調査を実施し、その結果から結論的に「低地遺跡は季節的な一時的に利用する遺跡」で、「背後の台地上が主要な集落地であろう」としている。

（註2）筆者の採集による鹿角製の「ソケット様角骨器」である。第12回2の土器と共に採集したものであるが、類例もなく所属時代も用途も不明。戸村 1995『フィールド考古足あと』8号に掲載。

（註3）取香川低地遺跡でも同様に煤状の炭化物が付着した多量の土器と、夥しいニホンジカやイノシシの骨が出土していることから、動物の解体場所であった可能性を指摘している。この遺跡の場合、土器に付着した炭化物は何を物語るのであろうか。高谷川泥炭層遺跡や多古田泥炭層遺跡においては、獸骨の出土はこれまでのところ確認されてはいないが、共通した土器の状態が見られる。

## 参考文献

- 清水潤三 1958a 「千葉県山武郡高谷川遺跡（第2次）」『日本考古学年報』7
- 清水潤三 1958b 「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）」
- 清水潤三 1963a 「千葉県山武郡高谷川遺跡B地点」『日本考古学年報』6
- 清水潤三 1963b 「漆塗櫛—千葉県横芝町谷合出土—」『考古学雑誌』第48巻第3号
- 鈴木公雄 1968 「関東地方晚期縄文文化の概観」『歴史教育』第16巻第4号
- 寺門義範 1972 「縄文時代遺跡の立地類型統論」『水戸論叢』7・8・9合併号
- 藤下昌信・宮入和博 1974 「野毛平・同免取香川低地遺跡の調査」『成田市の文化財』5
- 西山太郎 1975 「九十九里地域の縄文時代について(II)」「なわ」第14号
- 町史編纂委員会 1975 『横芝町史』
- 西山太郎 1980 「低地遺跡の覚え書き－特に九十九里地域を例として－」『史館』12号
- 西山太郎 1980 「千葉県山武郡横芝町木戸台低地遺跡について」『史館』第12号
- 八日市場市史編纂委員会 1982 『八日市場市史 上巻』
- 戸村正己 1982 「高谷川泥炭層遺跡について」『芝山町史研究年報』1
- 戸村正己 1983 「千葉県高谷川遺跡発見の釣手土器」「フィールド考古足あと」1号
- 埼玉県教育委員会 1984 「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書」
- 借当川遺跡調査会 1984 『八日市場市矢摺泥炭遺跡発掘調査報告書』
- 多古町遺跡調査会 1987 『中城下泥炭遺跡発掘調査報告書』
- 八日市場歴史研究会 1990 『桜井茂蔵文化財アルバム』
- 千葉県文化財センター 1991 『多古町南借当遺跡』調査報告第195集
- 戸村正己 1991 「千葉県山武郡高谷川遺跡の採集遺物・特に縄文晚期資料（土器）について」  
『フィールド考古足あと』7号
- 芝山町教育委員会 1992 『芝山町史』資料集1 原始・古代編
- 東総文化財センター 1994 『龜田泥炭遺跡』発掘調査報告書第5集
- 東総文化財センター 1995 『矢摺泥炭遺跡I』発掘調査報告書第8集
- 戸村正己 1995 「山武郡芝山町高谷川遺跡採集の骨角器・ソケット様骨角器について『フィー  
ルド考古足あと』8号
- 芝山町教育委員会 1995 『芝山町史』通史編 上
- 多古町教育委員会 1996 『多古町栗山川流域遺跡群』